

「陸」が「ロク」になるという「ロクでもない」話

“ろくでなし”の”ろく“はどんな漢字？

テニスのコートサイドで白砂賢治さんが、「佐々木さん、“ろくでなし”の”ろく“はどんな漢字か分かりますか？」と声をかけてきました。白砂さんは小田高の後輩で、高校時代テニス部員だっただけに、なかなかのテニスの強者なのですが、好奇心も旺盛で「好奇心の強さは若さの証明」という議論の正しさを立証しているようです。特に、私が日本語教師だと知って時々日本語の問題を仕掛けてくれるので楽しい限りです。「えっ、“ろくでなし”の”ろく“？古い言葉で、高い給料を得ることを意味する”高碌を食む“という言葉があるでしょ。あの石偏の”碌“だと思うけど。」と答えたのですが、「いや、それが違うんですよ、私も調べてみて驚いたのですが”陸でなし“って書くんだそうですよ、ほら。」と、スマホ画面に書かれていた正解を教えてくださいました。

インターネットも「陸でなし」論一辺倒

「碌は収入・所得という意味だから、“何の価値もない者”のことを“ろくでなし”っていうんじゃないのかなあ？」とブツブツ言いながら、帰宅してインターネットを検索してきたところ、どの記事もどの記事も「ろくでなし」は「陸でなし」一辺倒で、「碌でなし」と書くのは当て字」というダメ押し解説もありました。「陸」はまさに陸地の事で、「平らなこと」も意味していて「正常なこと」や「まともなこと」を指し、人については「真面目」という意味などで使われていたのだそうです。現代でも、平らな屋根を「陸屋根(ろくやね)」、水平の基準となる墨の線を「陸墨(ろくずみ)」と言い、「陸」が平らなことを表す言葉として残っているそうですから、これには参った参ったということになりました。

やっぱり”ろくなこと“は”碌な事“じゃないか

それでもなお、どの記事にも「陸でなし」に決またいきさつが書かれていないので、「いったい誰が”陸でなし“なんて字に決めたんか。また、陸なんて”平らな“場所だけじゃなくて丘あり山ありデコボコじゃないか。その上、“平らな”ことを”真面目“につなげちゃうのも無理があるんじゃないか。」と虫が収まらず、さらにインターネット検索を続けたところ、ついに「”ろくなことない“の”ろく“は”碌“になる。”碌な事“とは”ろくなこと“と読む。”碌“とは、まとも、正常な状態といった意味。それを否定する形で、満足いかない、普通じゃない、といった意味の表現が”ろくなことがない“となる。」と書かれた記事が見つかりました。

”陸でなし“より”碌でなし“の方が良かったのになあ

「ほらご覧、“ろく”は私が思っていた通り石偏の”碌“が正解だったじゃないかと大喜びすることひとしきり。しかし、勢い込んで、ほら「ろくだか」だって「ほうろく」だって調べてみると、それぞれ「碌高」、「碌高」と、示す偏・ネ偏(示 ネ)の漢字が現れたのでまたまたビックリ。慌てて、私が覚えていた”高碌を食む“も調べなおしてみると、石偏の「高碌」ではなくてネ偏の「高碌」が正しかったということが分かりました。そうかあ、私が記憶違いしていただけなのかと反省しながら、なおも「それでも”陸でなし“より”碌でなし“の方が良かったのになあ。」と往生際悪いづ

ツクサが口を突いて出ました。この手の由来・語源論は調べてみると「なるほど」とすっきりするものですが、どうもこのリロ変換問題まで伴う「陸でなし」漢字表現問題は漢字の悪いものでした。今度、同じテニス仲間の大谷康仁さんと中村正和さんにも、出身校の応援歌が「陸の王者」から「ろくの王者」に代わってしまって気分は悪くないのかどうか聞いてみることにしましょう。

日本語教師の清く正しい弁解とご忠告

いずれにしても、外国人など日本語を使えない人に教えるのが日本語教師で、日本語を使える人に教えるのは国語教師なんです。だから、「陸でなし」という漢字表記の問題は国語教育の領域に属するものであって、日本語教師がこれを知らなくたって何の問題もないのです。・・・と日本語教師の名誉のため清く正しい一言を記しておきます。むしろ、こんな質問が日本語教室の場で起こったなら、「ああ、この研修生も国語教育の領域に入ってきたんだなあ」とその成長ぶりを讃えるべきなのだと思います。しかし、だからといって国語教師がそのまま日本語教育をすることができるというわけではありません。例えば、動詞の活用形にしても、国語教育で教える未然・連用・終止・連体・假定・命令なんて文法用語を持ち出しても、外国人日本研修生にとって百害あって一利なしです。日本語教師は、これに代わって、「～ている」、「～である」、「～てください」、「～てあげる」、「～てみる」のように幅広く使われる「て形」などについて厳しい訓練をしたものでなければなれないのですよ。

日本語教育を試してみませんか

実際に、私が日本語教育の仕事をしていた会社でも、外国人従業員が急増するに及んで、私の他に日本語教育のできる人材を選定するに当たって痛い目にあったことがあります。人事当局が選んだのは高校英語教師だった女性でした。「日本語ができるのだから、英語で日本語を教えればいい」と思ったのでしょうが、随分乱暴な考え方だと思っていた。英語が使える外国人が日常日本語会話を勉強するなら彼女でも大丈夫なのですが、英語が使えなくて、しかも、業務に使える日本語を学ぼうとする外国人を教えることは無理だと判断したからです。もともと、教育法の中に「文法・訳読法」というのがあります。読み物の読解に必要な文法規則と語彙が教えられますが、口と耳を用いた音声コミュニケーションの習得にはまるで役立たないのです。私たち日本人が中学校時代から英語を学んでいるのに英会話が上達しないのも用いられているのが「文法・訳読法」だったからです。案の定、研修生同士のコミュニケーションにより、研修生が私からの教育を望むようになったので困ったことがあります。さて、ウイルス禍で極端に落ち込んだ外国人の来日件数も徐々に回復してきています。本人たちも大喜びすると思いますので、どうぞ外国人たちに積極的に日本語を教えてあげてください。但し、ご自分も日本語教授法の勉強をしながらするという事をお忘れなく。改めて、日本語教授法の勉強を始めますと、「ああ、日本語とはこういうものだったのか」と再発見することが多くて勉強することが楽しくなりますよ。

(完)